

# 司馬遷 シバ,セン 145B.C. ~ ?

中国漢時代の歴史家。字は子長。

漢の景帝の中元5(前145)年、夏陽(現在の韓城市)に生まれた。20歳の時から、長江の南北の史跡や曲阜の孔子廟などを歴訪して見聞を広め、帰って郎中の官に就く。命によって、巴・蜀以南や南方の邛(きょう)・笮(さく)・昆明に派遣された。元封元(前110)年、父司馬談は、太史令の官(天文や記録をつかさどる職)にありながら武帝の封禅の儀式に参加できず、憤りを発して死んだ。死に瀕した父は、論著しようとして果たせなかった歴史編纂を遷に託した。

元封3(前108)年、38歳の時に太史令となり石室・金匱の書(いわば帝室図書館の蔵書)や史官の記録を読み始め、太初暦の制定に従事した。42歳から『史記』の著述に着手したが、天漢3(前98)年、將軍李陵の匈奴への投降事件を弁護して死刑を宣告された。しかし、父の遺言を全うするため宮刑に服した。その後、大赦によって出獄して中書令となり、ついに征和2(前91)年、55歳で『史記』を書き上げた。卒年については不明であるが、武帝の末年の後元2(前87)年頃死んだといわれる。

## Great Books 08 史記(しき)

司馬遷が著した130巻の歴史書。自序の中では、『太史公書』と記されている。史記はもともと歴史書という普通名詞であったが、後に司馬遷の著した『史記』を示すようになった。

本紀12巻、表10巻、書8巻、世家(せいか)30巻、列伝70巻からなる(本文10巻を欠く)。中国で初めての通史であり、構成も独自である。本紀は、黄帝を初めとする五帝から漢代の当時までの、帝王の記録を編年で記している。表は創意の系図・年表で、書は制度史・経済史・風俗史などの文化史である。世家は封建諸侯・孔子・漢代の諸侯王などの歴史を綴っている。

列伝は群臣や人民の人間像で、司馬遷の歴史観がよく現れている。人間の歴史は、正義の人が栄え不義のものが滅びるものではなく、実はその逆の場合のほうが多い。歴史を書くものは歴史を書くことによって救いを見だし、書かれた人はこれによってまた救われる。国を譲ってついに餓死し、天下の人からたたえられた伯夷・叔斉の「伯夷列伝」を筆頭に、司馬遷が敬慕する晏嬰(あんえい)を含む「管晏列伝」へと続く。また、個人の行動が社会の動きに影響を持ってくる時代の中で、「游侠列伝」(俠客)や「貨殖列伝」(財産家)では、庶民の志や生活の様子まで生き活きと描き出している。列伝の最後は「太史公自序」で、『史記』作成の趣旨を述べている。

司馬遷は『易経』『春秋』などの経書、『国語』などの歴史書をはじめ諸子百家の史料を編纂し、また自ら尋ね歩いた地での伝承を加えて『史記』を作り出している。彼が編み出した歴史叙述の大系は、紀伝体とよばれる。その後の正史に用いられ、『史記』は正史の頭初に位置する。

注解書は多いが、六朝宋の裴駟の『史記集解』、唐代の司馬貞の『史記索隱』や張守節の『史記正義』が三注とよばれる。司馬貞は五帝の前に三皇本紀を補っている。その後、明の凌稚隆の『史記評林』が活字本となって普及したが、現在では、日本での研究も網羅した瀧川亀太郎著『史記会注考証』(昭和9年刊)が主なテキストとなっている。『史記』は中国の古典であるが、日本でも長く古典として読まれ続けている。手鈔(しゅしょう)本は敦煌の石窟から発見され現在フランスにある3巻を除いて、すべて日本で所蔵している。中国・日本とも『史記』や司馬遷の歴史観について論ずる書が多い。

## Key Word 太史公自序

父はかつて、「周公が死んでから五百年して孔子が生まれ、孔子が死んでから今日まで五百年になる。大道の明らかであった世を受けついで、孔子の述作した易の繫辭伝(けいじでん)を訂正し、春秋を続編し、詩・書・礼・楽の源流をたずねることができるだろう」と言ったが、父の志はここにあったのだろうか。ここにあったのだろうか。とすれば、わたしはどうしてぐずぐずしておれよう(略)処刑されたのち、退いて深く思いをひそめ、こう考えた。「そもそも『詩』『書』の、意味が隠微でことばが簡約なのは、その志すところを遂げたいと思うからである。むかし西伯(ゆうり)は羨里(とら)に拘われて、『周易』をのべ、孔子は陳・蔡に困苦して、『春秋』を作り、屈原は放逐されて、『離騷』を著わし、左丘は失明して、『国語』を作り、孫子臆(そんしひん)は脚を斬られて、兵法を論じ、呂不韋(りよふい)は蜀にうつされて、『呂覽』を世に伝え、韓非(かんび)は秦にとらわれて、『説難』『孤憤』の諸篇をつくっ

た。『詩』三百篇も多くは賢人聖人の発憤によって成ったものである。これらはみな、人の心に鬱結しているものがあり、それを洩らすことができないので、このように過去のことを述べ、思いを未来に寄せたものであろう」と。そこでついに陶唐よりこのかた<sup>りんし</sup>麟止までのことを論述した。その記述は黄帝より始まる。

<小竹文夫,小竹武夫(訳)『筑摩世界文學大系7 史記2』 筑摩書房>

## ◆ Great Books 文献案内

- 📖 新釈漢文大系 38・39・41・85・86・87・88・89・90 / 吉田賢抗,水沢利忠(著)  
明治書院 1973~1996年刊 <082/14>  
\*本紀1・2 八書 世上・中・下 列伝1・2・3(列伝は40巻まで)。本文・和訓・通釈・語釈等の記載がある。『史記会注考証』と『増訂史記評林』を底本とする。
- 📖 史記列伝1~5(岩波文庫) / 小川環樹(ほか訳)  
岩波書店 1975年刊 <122/シ/1~5>  
\*現代語訳。一部略あり。テキストは『史記会注考証』
- 📖 和刻本正史 史記1~2 / 長澤規矩也(解題)  
古典研究会 1972年刊 <222/63/1~2> 資料番号 10470938, 10470946  
\*鶴牧修来館蔵版『増訂史記評林』の影印
- 📖 筑摩世界文學大系6・7 史記1・2 / 小竹文夫,小竹武夫(共訳)  
筑摩書房 1971年刊 <908/28/6~7> 資料番号 11875325, 11875333  
\*現代語訳。一部略あり。『史記会注考証』を主本としている。
- 📖 中国古典文学大系 第10~12巻 史記上・中・下 / 野口定男(ほか訳)  
平凡社 1968~1971年刊 <928/4/10~12>  
\*現代語訳。一部略あり。『史記会注考証』を主本としている。
- 📖 二十五史史記集解 第1~40巻  
二十五史編刊館(台北) 1955年刊 和装 <222/13/1~40> 常置  
\*仁壽本。北宋景祐監本『史記集解』の影印。

## ◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 史記の事典 / 青木五郎,中村嘉弘(編著)  
大修館書店 2002年刊 594p <222.03/129> 常置(相談室) 資料番号 21502521  
\*司馬遷と『史記』について調べるのに便利な事典。司馬遷の生涯、『史記』の来歴、年表、文献目録のほか、名場面50選や人物、故事、名言などを収録している。
- 📖 司馬遷とその時代(東洋叢書) / 藤田勝久(著)  
東京大学出版会 2001年刊 271, 6p <289.2KK/415> 資料番号 21429576
- 📖 史記の構成と太史公の声 / 伊藤徳男(著)  
山川出版社 2001年刊 243p <222.03KK/127> 資料番号 21423702
- 📖 司馬遷の研究(汲古叢書) / 佐藤武敏(著)  
汲古書院 1997年刊 618, 23p <222.03GG/114> 資料番号 21093547  
\*『史記』を司馬談・遷の共著とする説の論証や司馬談の発憤死の検証をおこなっている。
- 📖 史記を語る(岩波文庫) / 宮崎市定(著)  
岩波書店 1996年刊 264p <122/ミ> 資料番号 20839718  
\*1979年刊岩波新書『史記を語る』に「『史記』の中の女性」を加えたもの。
- 📖 世界の名著11 司馬遷 / 貝塚茂樹(編)  
中央公論社 1968年刊 554p <080/5/11> 資料番号 12784302